

別冊ふるさと風

ふるさと風100号記念し (第一部)

はつめり

ふるさと風100号記念し「別冊ふるさと風」を創刊するに当り

『降る里』

白井啓治

『一日暮らせば、そこはふる里。』

ふる里とは、「心の降る里」。

心の降る里には、恋が降り、物語が降る』

気障つたらしいと言え、えらく気障つたらしい文である。が、このことは人の暮らしを創る原点であり、基本中の基本であると思っている。

町が活性化するためには人が盛らなければ、栄えない。人が盛るためには、そこにたくさん人の恋が生れなければ盛ることはない。

もう六十年近くも前になるだろうか。「♪僕の恋人東京に行ッチチ…」なんて歌が流行った。そしてみんな都会の恋に憧れた。揚句、東京は一大田舎町になった。そこで田舎者同士が恋をして人かどうかどんどん盛っていった。そして東京が手の付けられない程栄え、腐ってもいった。

惚れた女に、惚れた男に、この町出ていかないでと哀願されたら、六割がたの者がその町に留まるだろう。そうすれば人も盛りだす。人が盛れば、暮らしを創るための生産も創造されるようになる。

だから、ふる里とは恋の降る里でなければならぬのである。恋が降れば生産が生れ、物語が生れるのである。一見バカバカしい話の様であるが、この回転がなければふる里の町はゴーストタウンになってしまうのである。

その地に人が盛り、栄えるのは図式として捉えてみれば単純な事なのである。恋の降らない里には何も生まれてこないといえる。何も生まれてこないということには、そこには一喜一憂する物語がないということにもなる。突き放して言えば「魅力がない」である。

ふる里とは「物語の降る里」と定義づけ、先ずは自分達の住む地の歴史・文化を再発見し、新しい創造を考える力を養おうと、ふるさとルネサンス「民話ルネサンス講座」にスタートした「ふるさと風の会」であるが、講座の一期生が中心となって会報を立ち上げ、100号を迎えるに至った。

取り敢えずはルネサンス講座の講師を引き受けた小生が代表になっているが、会員として参加してくれている全員が、ふる里に吹く風の声として原稿を、毎月欠かさず書き続ける事によって成り立っている。その確かな歩みが「ふるさと風の100号」という物語をこの町に降らせてくれたのだらうと思う。

そして、これからの継続が真のふるさと物語を降らす事になり、希望の物語の降る里を創っていくのだらうと思う。

「ふるさと風の会」発足の経緯と

ふるさと風の会の思い及び考え方

ふるさと風の会は、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」を軸に、会員それぞれの思い・志を出来るだけ大声に会報に述べていく、語っていく会です。

ふるさと風の会発足のきっかけとなったのは、ふるさとおこし事業として2004年6月に始まった「ふるさとルネサンス塾・民話ルネサンス講座」であった。

その講座の講師であった脚本・演出家の白井啓治(会報ふるさと風の編集責任者)は、ふるさとの一つの見方として「降る里」と漢字をあてて、「ふるさととは物語の降る里」と表現している。

脚本家白井啓治が、ふるさとおこし講座の講師を頼まれたとき「ふるさとに物語をルネサンスで語る市民プロ作家を育成し、活性化を考える」ということなら引き受けましょう、と話したことで始まったのが「民話ルネサンス講座」であった。その講座開講の時に出席者に配られた「今、何故ふるさとルネサンスなのか」に書かれた内容が、今もそのまま「ふるさと風の会」における活動の基本的な考え方となっている。

なぜ「ふるさとルネサンス」なのか

ふるさと文化とは、その風土固有の生活形成の様式と内容である。こんな風な言い方をすると、分かったようでさっぱり分からない定義になってしまう。ふるさと文化をもっと平たく考えてみると「その風土に生活する知恵」ということができます。

一つの文化には一つの暮らしがあり、一つの暮らしのあるところ一つの生産があります。少し理屈っぽい言い回しになりますが、暮らしがなければ文化はないし、生産がなければ暮らしは成り立ちません。当然のことですが生産がなければ文化はありません。つまり、文化がなければ生産はないし、暮らしもないということになります

ふるさとに一つの文化が消えたということは、一つの生産がなくなり、一つの暮らしがなくなつたということになります。生活が一つなくなってしまうのです。何故なら、生活する知恵を一つ失ったからです。

ふるさと文化にはいろいろな側面がありますが、それらの一つ一つにはそれぞれ伝説だとか謂われ等があり、それらは伝承という形で受け継がれることよって日常生活の知恵となって活かされ暮らしを支えてきました。

ふるさとにはそれぞれ特徴的な産業が発展してきましたが、その裏を見ると、その産業にまつわる伝説や民話が必ず伝承されてあるものです。そしてそれは、その土地の人達の間で確りと認知されて口にはのびります。しかし、不思議なことにその産業の衰退にあわせて認知されていた伝説や民話が人々の口にはのびらなくなり、忘れられていき

ます。そして、その伝説や民話がすっかり忘れられたときには、その産業もなくなってしまう。

ここにふるさと文化をルネサンスし、ふるさとの活性化を考えた人材の育成のための塾が開かれることとなり、その第一段階として「民話ルネサンス講座」をスタートさせることになりました。

この講座は、ふるさと文化の一つである民話というところに視点を置いて、伝承を創造していく市民作家の育成を目指しています。

一つの文化を伝承していくためには、単純に埋もれた文化を掘り起こしていくだけではダメで、そこに受け継いでいこう、伝えていかなければ、という将来に対する必然性を持たせることが必要です。必然性という言葉が嫌なら有用性とか必要性といつても良いし、理由といつても構いません。何れにせよ将来にとって無意味なものであれば、

伝えたり、受け継いだりされることはありません。市民作家として伝承を創造するということは、掘り起こした文化(この講座では民話ということになります)に対して、伝えるに値するものがあるかを検証すると同時に、すり減ったり、時代的に不都合がきたりしている部分に対して、新たな価値を再構築して与える、ということです。新たな価値を再構築しない限り、受け継ぐ側に「受継ぐべき必然性」が認められなくなってしまいます。

今何故、ふるさと文化のルネサンスが必要なのかを考えたとき、その答えは伝承ということの意義を考えてみると納得できます。

伝承の意義というのは、受け継ぐに値する価値だとか理由ということの中身になるわけですが、その中身とは、個人的な考えではありませんが「未来の思い出」という風に捉え、考えています。

未来の思い出とは、未来への道標とか未来への一里塚と理解して頂ければ良いだろうと思えます。

伝承が途絶えたというのは、伝承の意義である未来の思い出(未来への道標、一里塚)としての役割がなくなつたからだと言えます。それは文化の火が一つ消えたということになります。

先に述べたように、文化の火が一つ消えたということはその地域での生活が一つ消えたということに繋がります。そして大袈裟にいえば生産が一つ無くなつたとも言えます。多くの伝承文化がなくなるということは多くの生産がなくなるということですから、多くの生活がなくなることを意味します。

これはかなりこじつけの説と言えますが、「古里」と書く「ふるさと」とは、十世代にわたつて口伝するもののある里のこと、という人がいます。しかし、この説はあながち笑えない説であろうと思います。

民話というのはふるさと文化の一つの側面ですが、伝承されてきた民話がなくなつてしまつたというのには、そこにはもう生活するための生産がなくなつたことを意味し、生活する場所ではなくなつたと言ふことができます。これは決して大袈裟な考えではないでしょう。

伝承するふるさと文化が一つ無くなるというのは、ふるさととしての役割が一つ無くなつたということになり、暮らしの歴史が一つ無くなつたということになります。

歴史の里石岡に来て、最初に耳にした言葉が「歴史では飯が喰えん」でした。歴史というのは生活することよって文化として紡がれていくもので

すから、歴史では飯が喰えんというのは実におかしな理屈です。歴史を紡ぐことを忘れて、歴史では飯が喰えんとは何事かと思つたものでした。

民話をルネサンスするということは、昔を思い起こす、昔の文化に今一度光を与えるということではなく、自分達の生活の場であるふるさとに生活できる生産を持つことであると理解して、受講者の皆さんには確かな市民作家活動の展開を願っております。

(2004年6月・開講式に当たって：白井啓治)

ふるさと風の会&ことば座の歩み(概略)

2004年。

6月、ふるさとおこし事業として、ふるさとルネサンス塾の「民話ルネサンス講座」がスタート。同年9月「劇団しゅわーど俳優塾」がスタート。

2005年。

1月、民話ルネサンス塾一期生が中心となって、親睦会ふるさとルネサンスの会が発足。劇団しゅわーどへの「ふるさと物語の執筆提供」が始まる。9月、民話塾一期生の作品展を開く。

この年は、ふるさとルネサンスの会及び劇団しゅわーどの活動が、NHKテレビ、朝日・読売・茨城・常陽新聞、常陽リビング、石岡市報、その他タウン誌などに取り上げられる。

2006年。

6月、ふるさとルネサンスの会を単なる親睦会から一歩進めて、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」を基軸とした会報「ふるさとルネサンス」を発行することとなる。

8月、NHK水戸放送局のギャラリーで、歴史の里「いしおか」ふるさとルネサンス展(10日間)が開かれる。

11月、つくば市の劇場「カピオ」で劇団しゅわーどが朗読劇「石岡物語」を公演。

12月、脚本・演出家の白井啓治と女優小林幸枝が劇団「ことば座」を立ち上げ、ギター文化馆を発信基地として「常世の国の恋物語百」に挑戦することとなり、そのプレ公演を行う。

2007年。

3月、ふるさとおこし事業「ふるさとルネサンス」が頓挫し、事実上の活動停止となったことから「ふるさとルネサンスの会」を「ふるさと風の会」と改称し、会報も「ふるさと風」と改名。ギター文化馆でのことば座公演に、4月より「風のことば絵」作家兼平ちえこが参加し、舞台背景画として「常世の国の五百相」への挑戦が始まる。

2008年。

6月、会報「ふるさと風」創刊2周年記念展を、ギター文化馆で開催。

2009年。

10月、ふるさと風の会及びことば座の合同3周年記念展&公演を開催。

2010年。

6月、「ことば座定期公演」に合わせて、「風の会展」を開催。

2011年。

6月、「ことば座定期公演」に合わせて、「ふるさと風の会」5周年記念展&座談会を開催。

2012年。

6月、「ことば座定期公演」に合わせて、「ふるさと風の会」6周年記念展を開催。

6月21日、NHK水戸放送局・ニュースワイド茨城で、新たな舞台表現「朗読手話舞」が紹介される。

2013年。

6月、「ことば座定期公演」に合わせて、「ふるさと風の会」7周年記念展及び記念トーク会を開催。また、7周年記念して、ことば座公演でふるさと伝承民話である「鈴ヶ池の片目の魚」を復活再生させた「新鈴ヶ池物語」を朗読。

また、風の会の分科会「風のことば絵」サークルの発表会を同時開催。

11月、ことば座東京公演が、両国シアターXでヨネヤマママコさんの共演を得て行われる。

2014年。

5月、札幌・「北の未来をつむぐ」のイベントで、小林幸枝の手話舞が「音楽と語り、つむぎびと」の演ずる「かがり舟」に招かれ共演。

6月、「ことば座定期公演」に合わせて、「ふるさと風の会」8周年記念展を開催。

9月、会報「ふるさと風」100号祭をみんなの広場2Fで開催。

【ふるさと風・100号を迎えて…】

『100号に思う』

打田昇三

はじめに

「歴史の里」と言われる石岡で「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」という不遜な看板を掲げた「ふるさと風」の会」は幕末初期

の勤皇の志士並みに異端視されるのではないかと余計な心配をしていたけれども、市民の皆さんが開明的かつ度量の大きい方々なので其の御理解御支援を頂きながら此処に第百号を発刊することが出来たことを心からお礼申し上げます。

戦国に学ぶ

偏見だが、国会中継を覗くと質問者と答弁する閣僚など以外はアクビを堪えて居るしかないように見える。「審議を尽くす」とは言っても双方の一方的な主張で回りが退屈しているようでは「審議」にはなるまい。反対意見は有っても最後は与党幹部で決めた通りになる。議会議制では多数決が絶対であるから、議員の数が少なければ逆立ちしても意見の通る見込みは無いのであるから、与党にならなければ居ないも同然に思えてならない。

与党議員でも法案に依っては反対したい者も居ると思うが、正面切って反対も出来ず、民主主義と言われる現代でも「勝者の論理」に立った独裁政治に近いことが可能なのであるから武力が全てであった時代には、それこそ時の流れを良く見極めて行動しないと生き残れ無かったであろう。

戦国時代の末期、石岡では桓武平氏の源流を継承する名門の常陸大掾(だいにじょう)氏が豊臣秀吉の掲げる「全国統一法案」に賛成しなかった為に、与党に追隨する刺客の佐竹義宣に攻められて滅亡した。天正十八年(一五九〇)十二月二十三日のことである。正確に言うと大掾氏は反対したのではなくて時流に疎く、そういう法案が有ることさえも知らなかったようである。滅ぼされた当主は清

幹という。未だ高校生ぐらいの年齢であったらしい。気の毒と言う他はない。

四百年ほど遡って、源頼朝が登場した頃の大掾氏は筑波周辺で広大な領地を持つ日本一の豪族とも言われていた。大掾(だいにじょう)と言うのは古代四部官制による常陸国の掾官(判官職)で正七位下に相当する。現代で言えば県の局長級であり一族が世襲し姓としていたのである。当主は始祖の繁盛(桓武平氏の祖とされる貞盛の弟)から数えて七代目の義幹になる。筑波山麓の南に館を構え職務として石岡(国府庁舎)に通勤していた。監察職でもあるから毎日は来なかったと思う。

この一族は平家全盛時代でも一門に加えて貰えず裕福な地方武士に徹していた。更に源氏の時代になると歴史上で有名な「曾我兄弟の仇討事件」に関連してあっさり潰されてしまうのである。それも鎌倉幕府・源頼朝の意向では無く……と言うより源頼朝暗殺未遂事件の付録で犠牲になったと思われる。桓武平氏系豪族で、余りにも財産(特に不動産)を持ち過ぎたのが原因であろう。

一方的な悪意で推測すると、此の陰謀を仕組んだのは北条氏・小田氏、そして跡目を相続出来た大掾支流の馬場資幹(水戸)ということになる。源頼朝は事件処理の命令権者ではあるが、本当は自分が狙われたことを知らない。しかし六、七年後には脳卒中に見せかけて消される。

潰された常陸大掾本流は実は曾我兄弟や敵役の工藤祐経とは近い親戚関係にあった。推定であるが大掾義幹の正室が是から述べる伊豆の豪族出身であったと思われる。その為に領地を没収された大掾義幹は伊豆に移され、曾我兄弟及び工藤祐経が出た一族に預けられて寂しく生涯を終わった。

工藤祐経は敵(かたき)として討たれたから悪人のように伝えられているが、平重盛にも認められた文武両道に優れた武士であり、鼓(つづみ)の名手と言われて源頼朝とは義兄弟になる。頼朝も祐経も伊豆の豪族・伊東祐親の娘が最初の妻であった。伊東氏は藤原不比等(聖武天皇の祖父)の長男・武智麻呂系であり伊豆国の押領使(軍事・警察権を持つ国司)を務めて伊豆に土着し伊東氏又は工藤氏を称した。工藤とは木工寮(現代の建設省)の長官を務めた藤原氏ということである。

源頼朝も工藤祐経も、伊東祐親という人物に苦労をさせられた仲間である。頼朝のほうは子供ままで居たのに頑固オヤジの伊東祐親が、平家に睨まれているは大変というので無理に娘を別れさせ、子供は谷川に投げ落として殺した。頼朝も命を狙われたのだが危機一髪で逃れて北条氏を頼り、やがて北条政子と結ばれるのである。殺される予定であった子供は通り掛かりの僧に助けられ、後に東北地方の小豪族となる……その子孫が関が原合戦後に石岡市の隣村に領地を貰って幕末まで存続する。

工藤祐経は、一族の相続人なのだが幼いときに父親に死なれて叔父の伊東祐親が後見人となったのである。自分の孫を殺す程であるから、祐経を娘(頼朝の子を生んだ娘の妹?)と結婚させてから都へ行かせ土地の権利書などを自分の名義に書き換えしてしまった。祐経の母親がそれに気付き、祐経に知らせたので祐経は領地の返還を求めた。すると伊東祐親は怒って強引に娘を離縁させ、民事裁判官に賄賂を贈って領地全部を奪った。

伊豆に残っていた工藤祐経の家臣が義憤に燃えて主君(祐経)に替わり伊東祐親を暗殺しようと狩り場で待ち伏せをしたのだが、場所が深い山中で

あるから見誤って祐親の息子(祐泰)を射殺してしまつた。間違われた祐泰の遺児が曾我兄弟なのである。夫を失つた祐泰の未亡人は舅(祐親)の命令で幼い兄弟を連れて(いわゆる連れ子をして)伊豆の地侍であつた曾我某に嫁いだから曾我兄弟と呼ばれている。

片や領地を奪われ妻を取られ、祐親に狙われ絶望の淵に落とされた工藤祐経は支援者に匿われていたところ気の毒仲間の源頼朝が「平家打倒」の兵を挙げたのを知り其の馬前に馳せ参じた。治承四年(一一八〇)十月、京都から押し寄せて来た平家の大軍を富士川で撃破した源頼朝は、鎌倉を拠点として新たな軍政権を発足させた。不遇を脱した工藤祐経は、義兄弟でも有つたから源頼朝の側近中の側近として不動の地位を確立したのである。一方で、母親の再婚先で育つた曾我兄弟はそれなりに肩身の狭い思いもしたのであろう。

偏屈爺の伊東祐親は最初から頼朝に抵抗して平家の為に戦つていたのだが時代の流れには勝てず捕虜となつて頼朝の前に引き出された。憎みても余りある人物でも初恋の女性の親であり、また祐親の次男・祐清(曾我兄弟の叔父)が頼朝に尽くしていたから頼朝は爺を赦すつもりでいた。しかし祐親は頑固の看板を守るために自殺をしてみましたので曾我兄弟は祖父の恨みも受け継いだ。

建久四年(一一九三)五月、源頼朝は富士の裾野一帯で巻狩りを行った。二十日以上に亘る軍事訓練である。五月二十七日、見たことも無い大鹿が頼朝の前に現れた。周りに居た武士たちが射ようとしたのだが、睨まれて射ることが出来ない。

大鹿は武士たちを馬鹿にしたように睨みつけて悠々と去つて行つた。是を氣にした頼朝は狩りを

止めて帰ろうとしたのだが、北条氏などの重臣たちが理屈を付けて引き続き富士山麓の狩り場に頼朝を留めさせた。なぜ、そうしたのか?

いわゆる「曾我兄弟による仇討」が行われたのは其の夜のことである。源頼朝と多くの武将たちが陣所を構えたのは、有名な白糸の滝の近くだと推定されている。頼朝の仮屋に続くように一段低い場所に工藤祐経の幕舎が建てられた。それを取り巻くようにして諸將の陣幕が置かれていたのである。当然のことながら警備は厳重を極めており暗闇であるから曾我兄弟であろうとライト兄弟であろうと其処に侵入して工藤祐経を討ち果たすなど出来ない筈であつたが、それが容易に出来た。曾我兄弟という暗殺者に協力する者が居たことは小学生にでも分かる。協力者というよりも一部の重臣たちによる大規模な暗殺計画があり、その真の狙いは源頼朝の暗殺であつたと推定できる。

曾我物語によれば兄弟に斬られた武士が五十余人で負傷者は二百八十余人とある。如何に闇夜と言つても曾我兄弟にだけ照明装置があつた訳ではないからこの数字が内乱を示している。伊東・工藤一族の確執を利用した源頼朝暗殺未遂事件と考へざるを得ない。事件の首謀者は源頼朝の暗殺と同時に常陸国筑波山麓一帯に根を下ろしていた桓武平氏系の大豪族・常陸大掾氏を滅ぼしてしまうことを考へたのである。その作戦は成功したが頼朝暗殺のほうは六年後にやっと実現した。

常陸大掾氏の拠点近くに領地を貰つた小田氏が大掾氏を刺激して置いて、同時に富士山麓では曾我兄弟による事件を起こす。上手くいけば源頼朝を暗殺出来るのだが、その作戦は失敗して側近の工藤祐経だけが殺害された。その代り「筑波山麓

大作戦」は成功して、平氏系の常陸大掾氏は緊急事態なのに小田氏の牽制にかかつて鎌倉へ行けなかつた罪で領地を没収された。跡地は小田氏と北条氏らが手に入れた。小田知家は頼朝の信任厚い武将なのに狩に参加してないのが怪しい。

曾我兄弟の事件で暴れ回つた兄弟のうち、生き残つた五郎時致(ごろうときむね)に対する尋問を担当した武士の一人は狩野介宗茂であり、曾我兄弟の叔父に当る人物だと思われる。純粹な仇討事件であるならば、当時者の縁者に取り調べをさせる筈が無い。このことをみても、事件が単なる仇討であるとは思われない。常陸国に居た平氏系豪族は、こうして強引に排除されたのである。

功績により後地を貰つた馬場系大掾氏は、水戸と石岡を拠点として戦国の時代を生き延びてきたのであるが西の方から北条氏康、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康などが出しゃばつてくると、多かれ少なかれその影響を受けるようになってくる。常陸国北部に居た佐竹氏は関東平野部に出稼ぎに行つて後北条氏とは長年に亘り戦つていたから豊臣秀吉の小田原攻めは「棚から大福餅」が落ちて来たように嬉しく、秀吉に急接近したのである。

秀吉は江戸近辺を徳川家康に任せ東北地方の黄金に狙いを付けた。常陸国などは欲しがる佐竹に「好きなようにしろ」と言つたので馬鹿正直に受け取つた佐竹氏は年末で忙しいのに水戸城の江戸氏を滅ぼしたついでに府中城へ攻めて来た。戦国大名でも現代の庶民でも時代の流れに注目してないと不意の増税など思わぬ災難に遭う。敢えて言わせて頂ければ、府中城落城と大掾氏の滅亡は、停滞する石岡への警鐘と取れないことも無い。

ふるさとルネサンスの会会報第一号(2006年6月)から、ふるさと「風」第100号(2014年9月)まで百冊の会報誌がおよそ九センチの高さに積み上げられています。

皆様のご愛読に励みを頂きながらそして市民の皆様さんとの触れ合いとそこで得られる物語を大切に主に石岡の歴史をご紹介して参りました。

『画家であれ、俳優であれ作文力のない者は達成が難しい、今日の嬉しかった事、楽しかった事を拾って言葉におとしなさい』

『歴史に関しては十分な顕彰が必要である』とのふるさと風の会代表、白井啓治先生の教えのもと、これからも毎月の文作に四苦八苦しながらも、石岡の物語に取り組んで行きたいと思えます。

私は平成二年三月に石岡の住民となりました。どうぞ宜しくご支援の程お願い致します。

100号を振り返って見て史跡や文化財に対して、こうなってほしい、この方が良かったのではと、希望や願い(私にとりまして夢)を記してきました。その中で嬉しい事に二つほど夢が叶えられました。

(一)目

平成二十年(2008)四月、会報第二十三号にて、題して「バス運行の復活を」走る走る小型バス、名付けて古都いしおか号で結びました。

その後一年余りで私の「古都いしおか号」は「ぐるりんバス」(命名は平成二十四年四月)として走り出してくれたのでした。

「観光地としての市の魅力を多くの市民に知って

もらうとともに、観光客の交通の利便性を高める為に」

として今年も平成二十六年春に四月、五月、六月秋に九月、十月、十一月いずれも土、日、祭日のみ運行されています。

石岡駅バスターミナル発↓常陸風土記の丘↓体験型観光施設朝日小学校↓茨城県フラワーパーク↓十三塚果樹団地(秋コースのみ)↓やさと温泉ゆりの郷↓茨城県フラワーパーク↓常陸風土記の丘↓石岡駅バスターミナル着。約一時間で巡回。乗車券中学生以上1000円、小学生500円一日乗り放題。乗車券販売は石岡駅前観光案内所、他発着地。一日のバスの便は石岡バスターミナル発第一便八時四十分から第七便十六時十五分で終了。各便を上手に利用して石岡の大自然を満喫し温泉ゆりの郷でゆっくり体を癒しお帰り頂く。

石岡市民の皆さん如何ですか。何回体験なされましたか。最近朝日トンネルも開通し市、県外の皆さんが車でのお越しが多くなりました。市内の皆さん、愛車は休ませ、一日ゆっくり楽しまれ、その体験を皆さんにお伝えし、是非石岡の観光ガイドとして一役買って下さい。

(二)目

解体修理中の陣屋門が懐かしい元の場所に戻ることになりました。

会報第三十三号(2009、二月)に題して「歴史ガイド」に同行ねば(愛読下さ

っている方からのご質問で「従来茨城県指定史跡であったものが、何故建造物指定となったのでしょうか」にお答えしての、ご紹介文でした。最後に結んだ文はこうでした「新と旧の共存、どちらも生かす事が最善策であったのではないでしょう

か「歴史の里いしおか」だからこそ、新と旧が磨き合って。陣屋門が元の位置に戻ったならば、現在の市民会館の存在も、オープン当時の市の発展を感じさせる明るい光に復活するに違いない」と。一八二八年に建てられた陣屋門は今年で一八六歳の命を誇ります。「歴史の里いしおか」として、唯一誇れる建造物です。月に三回ほど石岡市民俗資料館で受付をさせて頂いておりますが「陣屋門はどこに?」と尋ねて来る方が多い事に驚いています。遠くは四国の方から東京、神奈川、勿論県内の方々等、つい一か月前には京都から三十歳の京美人さん「仕事で石岡にきました、是非見学したかったです」と。

大正時代には実科女学校(現石岡二高)の正門として活用され、移転後は石岡小学校の校門として親しまれていました。しかし昭和四十一年七月に市民会館建設が計画され、歴史的场所に巨大な建物が建ち、市の歴史的シンボルである陣屋門が追いやられる事になりました。これに大反対の狼煙を上げたのが昭和八年に発足し、歴史研究と保存活動を展開なされていた石岡史跡保存会(創始者のお一人であった今泉義文様は現、今泉市長さんのご尊父様です)の皆さんと、約八〇〇〇人の市民の陣屋門保存会の会員で市民会館建設の延期を要求する趣意書を出したものの、昭和四十三年四月市民会館はオープン、次々と打ち出される明るく、楽しい市民会館の文化事業の前に陣屋門は狭い三叉路の一角で車にぶつけられ、屋根には草が生え、いかにも暗い老朽化した過去の遺物とされてしまいました。ついに昭和四十三年九月、県指定有形文化財としての史跡から建造物へと指定変更され、翌四十四年三月に移転の工事が行われることになりました。市民

会館の裏側でひっそりと建っていた陣屋門は今泉義文様を中心とする保存会と八〇〇〇人の市民保存会の保存運動がなかったら破壊されて、地上から消え去っていたかもしれないということでした。

石岡史跡保存会の皆さんと市民の陣屋門保存会の皆さんにしっかりと守られた陣屋門が懐かしい地に戻られ凛とした勇姿で門戸を開いて「歴史の里いしおか」の魅力を高らかに呼びかけてくれる事でしょう。そして市民の皆さんが石岡の歴史に理解を示し、知りお一人お一人が知識を得た範囲内で観光ガイド出来ることが街興しに繋がることを確信しています。

また、子供さん、お孫さんに語り継ぎ、郷土への誇りと、郷土愛を育む大人としての役目を果たす事にお役に立つ事でしょう。

最後に次の、私の夢は平成二十二年八月五日付で国の史跡に指定されました常陸国府跡、石岡小学校敷地内に国府の中枢部である「国庁」が発見されています。使われ無くなった教室を利用しての博物館が出来る事です。

参考資料 いしおか 昭和の肖像

100号を振り返った時に… 小林幸枝

2006年6月に「ふるさとルネサンス」を創刊し、その後「ふるさと風」と改名し、2014年9月号で100号になりました。

文章を書くことが大の苦手な私に、舞台俳優を目指すならば、自分の思うこと、考えることを文章にまとめることが一番の稽古になりますからね、

とふるさとルネサンス・民話ルネサンス講座の兄妹として設立された朗読劇団シワードに入団した時に白井先生に言われました。

入団一年後に、会報「ふるさとルネサンス」が創刊されて、私も打田さん、兼平さんに手を引かれるように参加したのでしたが、一度も原稿をパスする事なく100号まで来るとは思ってもいませんでした。

生まれた時からの輩者である私にとって思いや考えを文章にまとめるという事は、一番の苦手なことでしたが、先生に助けられながらここまで続けてこられたのは、朗読手話舞の女優として成功したいという願いが強かったからだと思つていました。

私の十八番の出し物である「新鈴ヶ池物語」の最後に舞う鈴姫の舞の詩は打田さんが書いて下さったもので、舞の背景には兼平さんの絵が飾られています。打田さんの詩を、毎回、分かりやすい言葉に直し、それを手話に翻訳し、舞に創りかえて行くのですが、このような作業は、会報に文を書くという事でその質が高くなってきたのではないかと思つています。

100号まで来るのに8年と4ヶ月。よく頑張れたなと思います。この8年間を振り返った時、私に大きな影響を与えてくれたのは、東日本大震災での大津波でした。この大震災によって私の身のまわりにも大きな変化が現われ、手話舞にもその影響は大きくかわってきました。

白井先生の書かれる舞歌を手話舞に創るときにも、詩の見方が変わってきたと思います。特に、東京公演でプロデューサーをして下さった塩見さんが行っている東北支援活動に大きな影響を受け、

さらに東京公演で衣装を担当して下さった熊谷さんのグループの行っている3・11を忘れない公演活動に手話舞で参加させて頂いたことで、更に大きく変わってきたと思います。

100号の記念号をつくるので原稿を書くように言われた時、すぐに大震災の現場へ行くことを思いつき、早速出かけてきました。

熊谷さんの書かれた「かがり舟」の地である気仙沼や陸前高田を遅ればせながら見て回ったのですが、その爪痕はまだまだ生々しく残されて在りました。

復興のまだまだ進まない気仙沼や陸前高田の現状を見て、「龍の涙」や「苧萱姫物語」に書かれた舞歌を思い出しました。

『人の世は

しばし旅居の仮り枕

命の永久になかりせば

仮りの枕に欲の積(あつ)めども

明日の夜明けの見るは難し』

災害は忘れた頃にやってくる、と言われますが、自分達の本当の幸せな暮らしとは何かを考え、勝手な欲だけを追い求めない、人のための復興を考えていかなければならないと思えました。

東北、頑張れ！ ふるさと頑張れ！

何かを求めていこう

伊東弓子

今年には復興支援映画「天心」が、県内あちこちで上映された。

石岡市には、小林恒岳先生、小美玉市には落合

青光先生とお二人の日本画家がおられる。その絵心を引き継いでいる生徒さんも数多い。その人達はどういう働きかけをしたのだろうか。苦悩を越えて道を開かれた天心先生を多くの人に知って貰うよい機会だから、茨城の地元で取り組むのは当然、私もそれなりの手伝いをした。

妹は小林先生の下で日本画を学んでいる。先生の展覧会、生徒さん達の作品は、事あることに見せていただいている。その時時、必ず知人に声をかけ、孫をつれて行くことにしていた。その日も四万騎園で小林先生の展覧会に行き、孫たちは小林先生との交流の機会がもてた。作品だけでなく描かれた先生とお会い出来たことは、素晴らしいことだった。その足で小川アピオスに向かう道中、震災を受けた五浦の事、六角堂の事、天心先生の事、小林先生、やっこぼちゃんの絵が繋がっている話しをした。会場近くには大勢の人がいた。しかし、今までの意気込みとは裏腹に、その後次々に衝撃を受けることが始まった。

「こどもはどうだろう」
「来ちゃったものは仕様がなainkanじゃない」という受付の女の人たち。

「ちよつと聞いてきます」
と一人が出かけ戻ってきた。
「来た子はいいいそです」
まあ一安心した。子供達に面目を果たせた。二人は広場の長い行列の方へ走って行った。

「代金はどうしよう」
と、ごちゃごちゃ言っているのを、
「大人と同じに支払います」
そこへ消気た二人が戻ってきた。
「小学生は駄目だと言われたよ」

「この映画会を開いた責任者がいいと言ったんだからいいの」
と押し戻そうとしたが、姉の方は、

「もう観ない。車の中にいる」
いくら話しても無駄だった。弟は母親と、姉は車の中に。私は観ても落ち着かず、中座して呼びに行つたが、動こうとしない子を不憫に思った。この子の心には何を感じているのだろう。

終ると同時に映画制作に携わった人と、上映の実行委員長さんに理不尽さを尋ねた。制作に携わった人は、県内の取り組み、上映状況を話してくれた。制作意図、熱意は素晴らしく小学生を対象に学校で上映した話しも安心して聞いた。ただ、副市長と・・・学校が同じだ」との話しにはがっかりした。実行委員長の話しによると、小学生は対象にしていない。それはあまり見せたくない場面が二ヶ所あるとか、理解が難しい内容だとか、その場句飽きて歩き出したり、騒いだりすると迷惑になる。結局その時大人はどう対処していくかは考えず、事前の防御として取り組んだにすぎないのだ。興奮している私に冷静な相手、己自身が惨めだった。

石岡は一日二回の上映、主催、後援も一寸違う。春の上映、真夏の上映、それぞれ地域で取り組む人たちの気持ちで纏め上げていくものだからと今、両市のチラシから見えてくるものを感じ取っている。石岡のチラシには小中高八〇〇円となっている。

その後、寿湯に行った時三センチもの厚さの量の「天心」のチラシが残っていた。持ち帰った。実行委員会に届けようと思ったが嫌味たらしいかと思ひ止めた。文化活動の名のもとに無駄使いも

甚だしいと改めて思った。

文化や歴史は、子供（産れてくるくる子が希望をもって…も含め）から老人（亡くなった人たちの生き方…も含め）までが作っていくものだろう。同じ地域で子供から老人が共有したものが育つて、新しい文化や歴史を作っていくものではないだろうか。

孫よ！あんなことから逃げないで、沢山のものを見、聞き、触れ、味わい、嗅ぎ育つていってね。

「皆が会話する場所」

菅原茂美

「風」の会報は、ついに100号に達した。私個人は第19号（2007年12月）からの加入なので、81回目の投稿となる。浅学菲才・独善と偏見を顧みず「継続は力なり」と信じ、懸命に投稿を続けてきた。起承転結も整わず、ただただ、がむしゃらに書き続けてきた。

独善と偏見はダメと言われたらもう書けない。私は文学には疎く、流れるような筆致とはいかず、間違いや思い違いがあれば、ご指摘いただけたら幸甚です。いささか暴走老人の気配ありなので…。但し、あつちに阿（おもね）り、こつちに気を使つて、あたらず障らずでは書く意味がない。恥を承知で毎回奔放に、筆を運んでいる次第。

＊

私の最大の関心事は「地球環境の変遷」と、そこに棲息する「人類という変哲な動物の行動」である。人類として特別の存在ではない。一介の動物で、自然の一部に過ぎない。人類は霊長類のうちでも最後に出現した、いわば末席に座るべき新参

者。アフリカを出て世界に散ったのは7万年前。丁度その頃、スマトラ島のトバ山が大噴火し、塵灰が舞い上がり、以後6000年間も太陽光が十分に届かず、地球は寒冷期に突入。絶滅寸前まで人口を減らした。そこで人類は寒さから身を守るために初めて「衣類」を身にまとうようになる。すると人類に寄生するアタマシラミは、コロシラミを分科。DNA解析の結果も7万年前に両風は分科したことが明確になった。着物を着る事によりヒトを人たらしめたと仮定するなら、文化的人類の誕生は真に新しい。そして13000年前、メソポタミアで、それまでの罍(ねぐら)定めぬ狩猟採集生活から農耕牧畜の定住生活を始める。この辺からヒトは人らしくなった。それでも最初のうちは慎ましやかで、天を恐れ、神を敬う謙虚な姿勢であったが、大航海時代・産業革命時代に入ると、人類はのぼせあがり、常軌を逸する傲慢な生活をするようになる。大層ぶって大面をして大自然を我が物顔で破壊していく。その行動が私にとって許しがたき事。それゆえ空から鳥の目で俯瞰し、道義に反する人類の行動には、威儀を正すよう意見を述べ続けてゆきたい。

まず地球気温は1906年〜2005年の100年間で0.74℃上昇したが、このままいけば、2100年には、4℃も上昇し、破滅的な事態に至る。現在世界は、それを2℃以内に留めるよう、懸命の努力を続けている。上昇の理由は、経済活動による人為的な温室効果ガス(CO₂)の増加が90%を占め、現時点でのCO₂濃度400PPMは過去80万年間で最高とのことである(気候変動に関する政府間パネルIPCCの発表)。

次に自分の住む環境を、自ら汚す動物なんて、

ヒト以外にはいない。野生の動物はみんな巢周りを綺麗にして子育てし、種族の繁栄に専念する。ヒトだけが、自ら有害な物質を身の周りにばらまき、水や土壌を汚し、更に危険物を次から次と造っては、わが身を拘束する。世界中から、陸海空とも交通機関の事故は、永遠に消え去らない。手抜き・怠慢・拝金主義などがその推進役。人類は大腦を膨らまして、己の生存に危ういもの造りに専念する愚行が多すぎる。

文明の暴走で、地球環境が汚染・破壊されていく現況は見るに忍びない。地球温暖化が進み、低地の沈没どころか、もつと恐ろしいマラリア(私は発生現場でその悲劇をしみじみ見てきた)など熱帯の伝染病が温帯でも大流行。そんな負の遺産を子孫に相続するわけにはいかない。更に得体の知れない化学物質を垂れ流し。水も空気も土壌も汚れ放題。水銀・カドミウム・ダイオキシン・PCBなど、更に環境ホルモンにより、内分泌攪乱を起こし、オゾン層破壊で、がん多発ときては何を可言わんや。良かれと思って造ったそのものが、将来人類の安全生息にどんな悪影響を及ぼすか、十分な検討を経ず、現時点での利益のため、見切り発車する愚かさ。なんのために大腦を膨らましたのか。そして最悪は放射能汚染と、現在、9か国が保有する核兵器23・385発(一部の国は推測)を一体どうするつもりなのか? 全人類を何回も絶滅させるだけの大量の危険物を競って保持する愚行。こんな負の遺産を、永劫に子孫へ相続するつもりなのか?

近年は発展途上国でも環境破壊が酷く、揚子江の魚は食えず、PM_{2.5}で窒息しそう。国内の環境整備は後にして、領土拡大に奔走する帝国主義的

発想。まずその手法は、近隣国を挑発する。相手国がそれに対抗してくると、わが身を守るために、やむを得ず闘うほかない...と自国を正当化する。軍師・官兵衛がいなくとも、小学生でも思いつく発想だ。国論を纏めるために、仮想敵国をデッチあげ、近隣国に八つ当たりする幼稚さ。迷惑千万この上なし。国内の人権問題・汚職問題・格差問題など早急解決すべき問題が山積しているだろうに...

先進国も発展途上国も、いい加減人類はこの目で目を覚まし、社会道義に主軸を置いた人間らしい生活を求め、公害を起こさないスロー社会即ち「減速生活」に徹するべき...と考える。

産業革命以来、暴走を続けてきた自然破壊。経済優先に目が眩み、理性を失った未熟社会。自由競争の文明社会は成果主義に溺れ、「人間の尊厳」という肝心なものを見失って、漂流を続ける難破船のようなもの。万物の霊長などと奢り高ぶっていながら、巨大自然災害でペシヤンコにされる哀れな生き物。利己主義で、欲張りの権化。北極海の海底資源も、「月」の未知の資源も、独占開発を目論む底知れぬ腹黒さ。そして世界の強国は、誰を殺そうとして、原水爆をあんなに沢山保持し続けているのか? それを制御できない「国連」などという「ままごと遊びのお巡りさん」は、一体何をしているのか。権力闘争に明け暮れる醜い生き物。それが今日の人類の姿だ。いくら鼻屑目に見ても、プラス面よりマイナス面が多すぎる。

*

いかほど文明が進化しようとも、人類の「愚行」は留まるところを知らない。その愚行を繰り返すのが「人間の本性」だとは認めたくない。折角、

大脳を膨らましたのだから、もう少し、増しな事にその能力を発揮できないものか。

清廉潔白な人格者が主導権を握る国家など、どこかに存在するのだろうか？ そんな聖人君子が台頭しつつあったら、腹黒い怪物どもに真つ先に潰される。毎年行われる石岡の祭りの勇壯な獅子舞は「魍魅魍魎（ちみもうりょう）の悪霊を退散させるため」と、ものの本に書かれている。ならば近年、力による国際秩序の破壊を試みる不逞の輩が、世界のあちこちに、やたらはびこっているの、あの獅子頭で、怪物どもの首根っこを喰いちぎってほしい。

昔、「性善説」など戯言（たわごと）を述べた御仁もいたようだが、世界の歴史は「性悪説」のオンパレードであった。侵略・略奪の繰り返し。そんな「巨悪」が支配する汚れた世の中に嫌気をさし、「小善」を好む温厚な人々で、ささやかで、平和小さな村を作っていききたいものだ。

アイヌの人々は、生存に必要な最小限の自然の恵みをカムイに感謝しながら頂き、徹底して自然を敬いながら生きてきたという。その精神は今、世界の研究者達から高く評価されている。そのアイヌの血を引く人々を、大陸から押し寄せてきた弥生以降の和人どもは悉く踏み倒し、土地や財産を略奪した。アイヌを日本の先住民として政府が認めたのは、なんと2008年のこと。それまで、あまりにも長い間、酷い差別がなされてきた。

そんな反省から、自然を敬う精神を強く習慣づけ、百年後の子孫に嗤われぬよう、今こそ徹底的な意識改革が必要である。我々「風」の会員は元より、多数ご投稿を頂いて、人類生残のために、本会報で提言を続けていきたい。片田舎のこんな

小さな会報誌から、国や世界の舵取りをする船長へ、強力にメッセージを発信していきたい。

治安と衛生の良さは日本が最右翼。私は僅かの国しか見ていないが、実感できる。それは故郷を皆で良くしていこうとする小さな努力の集積もたらした結果なのであろう。子孫が安心して住める環境作りに、皆で心がけたいものである。

さて本会は、故郷を讃え、歴史文化の再発見と創造を考える…をモットーとしている。会員はこれまで、文化面・歴史面・精神面などから懸命に故郷を盛り上げようと心掛け、誌面を満たしてきた。更に会員外からの貴重なご投稿を賜り、深みと色合いの豊かさを増して頂いた。

しかし、会員数は現在わずか7名である。数が増えれば良いというものではないが、もう少し同好の士が増え、自由闊達な意見が飛び交い、誌面が賑やかになれば、自ずと地域活性化に結びつき、街の発展にも繋がるのではなからうか。

「風」の会報はレベルが高いか、投稿など敷居が高くて…等、一部声が聞こえるが、そんな事はない。ただただこれまで命の叫びを力いっぱい高唱してきただけである。家庭の主婦でも御隠居さんでもぜひ加入されて、思いっきり自分を吐露願いたい。主筆の白井先生は、文章の上手下手は関係ない。思いっきり自分を表現することが大事。小学校作文の模範例を捨て、型にとらわれず、新たな自分の世界を切り開くことが大事…といつも言われている。気軽に門を叩いてほしい。

そこで思いつくのは筆者と読者との「対話の場」である。人生の根本原理を話し合う場が欲しい。

京都市左京区に「哲学の道」があり、琵琶湖疏水分線に沿った歩道である。桜花の頃は和服姿の老若男女で賑う。さすが京都！と驚き、後で聞いたら、舞妓姿さえ貸衣装屋の演出とか…。この道は西田幾多郎の散策コースで「人は人 吾はわれなり」とにかくに 吾行く道を 吾は行くなり」の歌碑がある。静寂だった昔は、哲学者の思索にもってこいの場所だったのかもしれない。

ならば、我が石岡にも仮称「哲学の森」とかがあってもよさそうなもの。閑静な郊外で、人が生きる意義など、じっくり話す場が欲しい。昔は、寺小屋から地域の文化度が向上した。幕末には吉田松陰の「松下村塾」から、明治維新の英傑を多数輩出した。プラトンはアテネ市郊外に学園アカデミアを開き、市民と対話し、霊肉二元論を唱え、更に道徳・国家論を論じたという。

あまり大きなことを言うつもりはないが、文明の進化が生んだ歪みが、環境汚染や地球温暖化を招き、動植物の絶滅危惧種が増えるばかり。これを現代人は漠然と看過している。2011年現在、乱獲などにより日本の絶滅の恐れのある動植物は87種（哺乳類5、鳥類38、植物23種など）。羽毛布団は確かに軽くて暖かい。しかしそのため地上から姿を消した鳥の数々。それが大変智慧ある人間行動の歴史だ。ウナギやマグロも、その轍を踏まないことを切に祈る。

現在の地球は「未来の子孫からの預かりもの…」という概念を、しっかり皆が抱くことこそ、最重要と考える。その舵取りの一端でよいから、我が「風の会」が役立てば、真に結構と考える。この荒んだ浮世にあつて、我々はどうか生きたら良いか、多くの人達が集まり、しみじみ話し合う場があつ

たらよいと思う。日頃の生活に「感動」があれば、認知症には、なりにくいという。

そして民話の発掘や、更に発展して歴史遺産にちなむ新たな民話を我々の手で創作し、手作り郷土の文化を構築していく場とすればよい。風土記の丘など、折角縄文のモニユメントがあるのだから、閑静な木陰で、万葉・古今集の恋歌等味わい、胸をときめかせながら、更に、純然たる哲学や芸術を語らう場を設けていきたいものである。

私は読んだこともないが、紫式部の「源氏物語」に「常陸介（ひたちのすけ）」という人物が登場しているそうだ。「介」とは「次官」を意味し、その上に「守（かみ）」がいるが、「守」は常陸の国では親王が支配し、現地には駐在せず、今日の茨城県副知事に相当する「介」が最高責任者となる。この人は紫式部の異母弟であり、藤原惟通（これみち）という。この人は石岡に赴任してきたが、まもなく病死（1020年）。いずこに埋葬されていることや不明だが、平安中期のロマンをかきたてられる。このように石岡は、源氏物語にもゆかりの土地である。ならば現代においても、文化活動を市民レベルでしっかりと大地に根を下ろし、強烈に展開していきたいもの。

ユートピアは誰もが望む理想郷。しかし、その実現は夢のまた夢。そこで我々「風の会」が音頭をとり、この故郷へ規模はどんなに小さくとも、ユートピアの創建を目指して、その「種まき」を始めようではありませんか。みんなで力を合わせれば、何かが生まれ、若芽はきつと元気に育つ。

遺跡の数だけ多くても「歴史の街」とは言い難い。そこに住む人々が、しっかりと歴史を認識し、更に自ら新しい歴史を構築していく気概が必要で

ある。一人一人の創造性の集積。それが文化というものである。絵画・音楽・文学何でもよい。又、工芸品でも芸能でも、それぞれの時代に、市民が情熱を注いで形に残せばそれが文化遺産だ。それをみんなで支え合う心が大切だと思う。経済発展は、ほどほどでよい。精神的に高い文化が輝いていれば、立派な文化都市である。手作りの文化を、皆で育てていきたいものである。

巨大な文化施設は特に必要ではない。小さな親切がその辺にコロコロ転がっている。これぞ真の住みよい街。みんなが、笑顔で挨拶し合い、故郷を誇りに思う…。そんな街づくりには皆で手を取り合っていこうではありませんか。

ふるさとに新たな息吹を

木村 進

私が石岡に越してきたのは今から丁度10年程前になります。長年勤めて来た企業を定年となるまで残りが数年という時でした。

定年後の新たな第二、第三の人生をどう過ごすか、地域の人たちとうまくやっていけるだろうか？そんなことをぼんやり考えておりました。恐らく、私と同じ団塊世代に生まれ育った人たちはこんな思いに駆られた人がたくさんいたと思います。何処に行っても競争ばかり、そして大きな塊はやがて国のお荷物などと言われる始末です。せつせと蟻のように働き、セミやキリギリスのように歌を歌うことなど忘れてしまっていたのです。そして定年までの残り年数が1ヶタを切ると、過ぎて行く時間のなんて早いことだろうかと時々た

め息をつきました。

子供の事など女房任せ、学校や地域の行事にもできれば行きたくない、そんな人間が地域社会でうまく立ち回る術など思いつくはずもなかなかないのです。

石岡には妻の希望でやってきたのですが、私にとっては職場が少し離れたくらいで、越してきた当初も家と職場とを往復する毎日でした。なにしろ、石岡は古臭い・眠ったような街にしか見えなかったのです。石岡は「歴史の里」とか「常陸国の国府」があった場所とかいわれますが、それも漠然と頭に浮かべるイメージはあるものの、祭りのとき以外にはまるで活気がなく、魅力もほとんど感じませんでした。

しかし、そんな私の気持ちを変えたのは「石岡は古代東海道の終点の都市である」という記事を見つけたことだったように思います。

それから、この石岡という都市の魅力に次第に捕らわれて行くようになりました。

古代東海道を探索し、伊賀国から順に国府のあった場所を海面を数m上昇させた地図で追いかけて、東京湾を船で渡った当時を目に浮かべ、上総(市原、下総(市川))と過ぎて、目の前に香取の海、流れ海などと呼ばれた大きな内海(霞ヶ浦、印旛沼、利根川などが一体となった内海)が現れるとルートがまるであらなくなるのです。これは当時きつと舟ルート、陸ルートなど様々なルートが組み合わされ、時代と共に変化していったためだと思われまます。

まだ未開の地もあり、海賊もいたでしょう。まだまだ政府の意に背いていた民族も住んでいたかもしれません。それを今現地に行つてわかるものでもありませんが、目で見ると何かを感じることに

ができます。このため自分の目で見て感じて物事を考える習慣が自然に備わって行きました。頭の中で想像の翼を広げ、大空に舞い上がって当時の人びとの想いなども考えるようになったのです。

その後、この石岡の地で夕日の沈む頃、看板建築の街並みを眺め、一つ路地に入り、夕暮れの町から筑波山の男女峰を眺めていると、真丸な月が優しく地面を照らし微笑みます。すぐ横には数百年、数千年前からのここに暮した人びとの残した跡(宍形、無形)が見え、感じる事ができるのです。八百万神も迎えてくれそうに思えてきます。

そして「まだお前の知らないことがたくさんあるよ」と何処からか声が聞こえてくるのです。表面を少しかじってもまだその下には私の知らないことがたくさんあります。少し深く掘るとそこに流れる風が私の頬をなでてきます。

当時、行政などで作るホームページなどほれも画一的なものばかりで外に向けて何を発信したいのかがわからない物ばかりが目につき、それから自分から発信してみようと今から6年前にホームページを立ち上げました。これも自分の記録として残す意味合いと、しばらくすれば、雨後の筍のように色々な情報が湧いてきて、私の発信など埋もれてしまうに違いないからそれまで頑張ろうとの思いでした。

しかし、私が最初の考えたより、情報発信の量や質のペースは驚くほど遅いものでした。

そんな中で石岡から情報を発信続けている「ふるさとルネッサンスの会」(今のふるさと風の会)の存在を知りました。

熱心に活動を続け、本物を目指しまっしぐらに突き進むこの会は他のものと違いました。その当

時は横から眺めている程度でしたが、何度かお会いするうちに会の話し合いに参加させていただくようになりました。

私はビジネス文章以外には文章もほとんど書かず、小説のような文章など書けるはずもないことは重々承知していました。そのため、しばらくの間、会に参加しても皆さんの歴史の話などをたのしく聞き、会報作りの手伝いや会のホームページ作成の手伝いをさせていただいておりました。こんなことが1年以上続いたでしょうか。

今から4年前の夏に白井主宰からブログなどやりますか?と聞かれ、私も、現地に行つて感じた想い、吹く風の匂いや音などの情報はこのままでは全く発信できず、何か別な手法を考えていた時でしたので、すぐに「では私がまずブログを作つて見ます。」と返事をし、何とか「まほらの風に乗つて」というブログを立ち上げました。それから白井主宰もすぐ作られ、今まで4年間ほとんど欠かさずことなく書き続けています。

これも一人でやっていたら途中で挫折していたことでしょう。

この風の会に正式に入会させて戴いたのは2年前です。ブログ開始から2年が経過していました。会費も払わずこの会に好きな時だけ参加して約3年。そんな状態はいくらなんでも虫が良すぎますね。原稿を書かせて戴いたのは第78号(2012年11月)からです。ブログにたくさん記事は書いているのですが、こうして活字になる記事を書くのは難しいです。まだ良く書くこうと言う意識が先になり、書く前から構えてしまっているようです。これから少しずつ精進し「少し進歩したね」と言ってもらえるように頑張っていきたいと思えます。

それにしても100回を欠かさずに最初から記事を書き続けている諸先輩には全く頭が上がりません。

最後になりますが、この会の「基本的な思い」の中に「伝承民話は未来の思い出」というものがあります。

ここには、「石岡やこの周りの地域にたくさんのお話や伝承があったにもかかわらず、これがほとんど無くなってしまった。それを大切に守つてこなかったというよりは新しい息吹を時代によって与えてこなかった。民話をルネッサンスして伝承を与える」ということは、その地域の復興にはなくてはならないこと」という趣旨の事が書かれています。

この地は、私にとって生まれ育つた場所ではありません。またこの会に参加しているほとんどの方たちもまた同じです。でもこの地が好きな人ばかりです。

私もその「民話をルネッサンスして伝承を与える」ことをこれからしっかりと考えて行きたいと思っています。「歴史では飯は食えない」という人がいます。でも歴史をないがしろにして、新しい息吹を注ぐ人がいない場所は忘れられ早く滅びて行くことでしょう。

《ふるらの》

アレシシ蕎麦・蕎麦会席料理のお店です。

(ギター文化館通り)

看板娘(大)「つらら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

☎0296-33-0000

【ふるさと風・100号への応援歌】

ふるさと風が、100号を迎えるに当たり、第一段階の節目として、記念号「別冊ふるさと風」を刊行することになり、日頃より応援いただいている方々より、ふるさと風応援歌、そして特別寄稿文をお願いした所、皆さまから温かい応援歌、寄稿文をお寄せいただきました。この第一部には嬉しい応援歌を紹介させていただきます。

ふるさと風「縁に想つ」 一ノ瀬綾

赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり (子規)

最近の私は信州佐久の地で暮らしながら、身近な浅間山を眺めるたび、子規の一句を口ずさんでしまう。穏やかで優しい筑波山のシルエットには、十四年間も暮らした石岡(旧八郷町)の想い出が、ぎっしり詰まっていた。

平成元年に東京から八郷町へ移住を決めた最大の理由は、自然の豊かな美しさだった。住みついてから、地域住民の人情にほだされ、友人もたくさん出来た。もの書きの仕事も順調に進められ、数年後には茨城県内の名所旧跡めぐりも楽しくなった。

気が付いたら移住して十四年、私は七十歳になっていた。独身を通した身の始末を案じる肉親の配慮で、私は生れ故郷へ帰って来た。以来、石岡のみならず、茨城県全域が私にとって第二の故郷になってしまった。

多くの旧友との深い交流は絶えることがなく、今の生き甲斐になっている。その中でも「ふるさと風」の会報を毎号贈ってください、打田昇

三氏には改めてお礼を申しあげたい。拝見するたび、会員皆様のレベルの高さに、私はいつも胸を打たれてきた。その「ふるさと風」が今回、通刊100号出版を迎えられる由。心よりお祝い申し上げたい。100号祭の盛況を願いながら、昨今の文学の低迷ぶりを想う時、ふるさと風が目指す理念の堅実さが、改めて身に染みる。自分達が暮らす地域の歴史・文化の再発見と創造を考える…。

そうした観点で皆様の作品を拝読すると、自然に表現世界へ引き込まれていく。地域を愛する想念は深くて広く、遠い歴史の奥に、リアルな人間像が浮かんでくる。

私は己自身をしゃぶることで、作品を書いてきた。それが生きることだった。歴史や故里からの脱出者にとって、「ふるさと風」の世界はまぶしくて暖かい。

人はその地に骨を埋める覚悟がなければ、周りの本当の姿は見えない。私は八郷時代に名所旧跡はほとんど巡っている。筑波山にも登った。今はそれぞれの記憶も薄れたが、元々が旅行者気分で見えたのだ。

それでも「ふるさと風」の作品で、石岡市の歴史や現代の変動ぶりなどを拝見すると、故郷感覚でなつかしい。テレビで時折、放映される八郷地方や石岡市街など見かけると、わくわくして旧友に電話をかけたたりする。現実には暮らしている市民にとっては、多くの問題もあることだろう。

それだけに「ふるさと風」の目指す、堅実な理念を、一人でも多くの市民に理解してもらいたいものである。そして更なる充実と発展を期待して止まない。

九月二十一日から始まる「ふるさと風」100号祭が、大盛況であることを、信州の地より願いつつ一筆啓上。 かしこ

一ノ瀬綾 小説家

一九六八年「春の終わり」農民文学賞
一九七五年「黄の花」田村俊子賞
その他「独り暮らし」「幻の碧き湖」等作品多数

よぐぞ遠くまで一祝「風」100号 市川紀行

ふるさと「風」100号発刊を清々しい驚きをこめて心からお祝いするものである。困難を乗り越えた道のりの遥けさを想像すれば快哉を叫びたいくらいである。

しかし現在の筆者の方々の筆の息吹からは毎号確かな余裕しか感じられない。書くべきことがあふれ出るという紙面だ。主宰の白井氏はもちろん、皆さん役者ぞろいなのだ。疲れた様子など微塵も見せぬ。かつて記したことがあったが「七人の侍」の戦いはやまぬ。(艶なる巴御前方も入れさせていただいた。)そして会員以外にも門戸はひらかれていて、紙面の多様性をさらに広げている。

私は四期十六年の村長を五十八歳で引退して「劇団宙の会」と合わせて地方自治地域文化研究会「一望塾」を立ち上げた。

これは毎月一夜、地区公民館の座敷に机を並べて座りテーマに沿って勉強するものであった。様々なテーマにさまざまな講師がヴォランティア

で参加してくれた。村内外、県南地域から150人ほどが登録し、いつも30人が出席した。東京や新潟の著名な大学教授が来てくれたこともあった。日経新聞首都圏版が「草莽の志たかく」と押しにくれた。塾参加者から衆議院議員二人、市長ひとり、村長ひとり、二人の幹事役はそれぞれ町長、村長になった。議員も生まれた。勿論各人の才能と実力、努力の賜物であるが。そういう事情や私の演劇活動とも重なって四年ほどでお休みをいただき現在に至っている。

すこし余計なことを書いたが、その勉強会について毎回内容と意義とまとめを書いて会員に送ったのである。人材育成や共同理解のレヴェルアップなど目的は目的として大変疲れる作業ではあった。これがやつと三十八回であった。「風」は100回である。私はそれを言いたかったのである。はるばると来つものかなは「風」関係者の実感であろう。

拝読していつも感銘を受けるのは、たとえば白井氏の短文にあるように「ことば」に対する信頼である。云いかえれば「表現する…される」ことの価値へのゆるぎない自信である。いわば白井氏の「詩法」といってもいい。これが様式として具体化されたのが「朗読手話舞」であると私は思う。

小林嬢の舞いにことばは無い。無いけれどどしどしあるのだ。そのまなざしから指先までことばの美があふれるのだ。まさに「ことば座」の舞いである。そこで舞姫は芸術そのものになる。

ああ、美しい言葉たち。——批評にしても解説にしても、怒りにしても眩きにしても、縄文から古今の研究にしてもことばを紡ぎつないで八年有余、石岡の一角で稀有な文化を創り上げてきたふ

るさと「風」100号。ともすれば淀みがちな「歴史文化を誇るまち、石岡」はこの風をどう受け止めるのか。あるいは相変わらずやり過ぎすのか。ほんとうのことが問われる今後である。

因みにこのことを示唆する投稿小論文が「風」98号に異彩を放っている。土浦一高の同級生、畏友太田尚一氏の「石岡のまつり」論である。

その発祥を八、九世紀とか武家武士から引き継いだとか、あるいは「関東三大まつり」のひとつとか歴史的にありえない不実な誤りを創り上げて寄りかかることは止めて、歴史資料が示す通りに明治時代に生まれたことなどを明確にして、そこに石岡にしかない特性を見出すことが真に石岡の矜持を創ってゆくのだという。

——偽りの権威に寄りかかれれば単なる見世物に随し衰退するだけである。市民の感性と潜在するエネルギーこそ新たな展開を切り開くだろう。それがふるさと山河を渡る新しい風を生むのだ。石岡の一角で本誌「風」が100号まで歌って来たのはそのことなのだとしきりに思えてならない。

市川紀行 詩人・劇団宙の会主宰
元美浦村村長 陸平をヨイシヨする会会長
東海第一原発の再稼働を止める会 代表

土を耕し、心を耕す

吉野公喜

文化は辺境にありて文化なりとは、司馬遼太郎の言である。司馬史観の奥深さは論を俟たない。筑波山の山懐に住むことができて30数余年、山

への入り日、雲の流れに五感を包む日々は心楽しい。土を耕し、心を耕すことを念じながら。

司馬史観には遠く及ばない。しかし、文化は地域にありて文化なりを実践することしきりである。「ふるさと風の会」100号刊行に畏敬の念を禁じ得ない。快哉また快哉を叫びたい。

白井主筆の論考は、興味を深くそそり、知の巨人南方熊楠の言語・民族論を彷彿させるほどに魅力的である。慧眼、只々ありがたく思う。

打田氏の論筆は、毎号楽しみに読ませていただいている。さすがに筆を重ねるごとに読みごたえが増している。感謝の念しきりである。願わくば、「ことば(ラング)」のリズムに意を注がれて、司馬遼太郎の歴史観と筆の運びに肉薄していただきたいと思う。——僭越を省みずにも。

「朗読手話舞」の公演は、いつも楽しく心豊かな時間と空間にいざなってくれる。感激このうえない。朗読手話舞にみる音声言語と手話のもつ世界(手話言語)とのコラボレーションは、意味深い言語学的哲理を秘めている。言語表現における表層と深層の構造的成り立ちを否応なく意識させてくれる。

ふるさと風の会による表現活動の新たな文化的境地が常陸石岡の地から、鋭く発信され続けていることに喜びひとしおである。「楽しからずや」である。深く感謝して筆を擱きたい。

吉野公喜 筑波大学名誉教授
元東日本国際大学学長
主な著書「言語音の脳半球処理に関する実験的研究」「障害時教育」他

発刊百号、お喜び申し上げます。
八十九年の積み重ね大変ご苦労さまでした。皆様のご協力に対して敬意を表します。

坊主に「何か一言」ということなので、姉には断りましたが、再度の話したので、一文まとめました。

自分の与えられた仕ながら、人の老いることについて感じていたことを述べたいと思います。

おそらく告別に関わったことは千件以上だと思えますが、時代とともにその告別の仕方が変わっているようです。最近の傾向としては、「金をかけないようにする」「めんどうくさい。さっさと終わらせよう」「死んでよかった」と、亡くなった人の人格に対して敬う気持が非常に薄くなっているようです。私、住職の立場からすると「生ごみ」を処理するかのような気持の関係者が多くなっているようです。「死んでいってしまうのだから別にかまわない」と言っている人もいます。

このような例を言うときりがありません。「生ごみ」のようにあつかわれる死後、誠に、生きていた軌跡など微塵もなくなります。

全て無に帰していくのですから、これでいいでしょう。

しかし、ふるさと「風」なども、こうして続けているのは何かといえ、自分の生き方を求め、その軌跡を印している活動だと思えます。多くの人は、自分らしい生き方をして、自分を表していく。しかし、つまるところは全て無に帰します。

人というのは空しい。あわれな存在でしかないようです。空しい努力をしているのが人生なので

しょう。

しかし、それで終わるわけでもないようです。自分が誰かに認めてもらおうと、自分の存在を知ってもらおうと、自分が死んでも残そうと空しく努力するものなのです。

こういう全体を、宗祖法然上人は、「人間は愚かなものなのです」と断じています。

どんなに偉そうに語っても、行動としても、文章を綴っても最後は無に帰します。

私は、日に何百遍も何千遍も自分の愚かさを省みます。

幼い頃から、神や佛を信仰してきたわけではありません。太陽を見、星を見、宇宙を見つめるとき、数千万年後には太陽も、地球も、又人間も消滅します。そういう存在のこの小さな生命でも、今を大切に生きようと考えます。これは老いて死に帰すまで続きます。

長寿の国、誠に幸いでありませぬ。昔からみれば国や社会が、老いの施設や介護に力を入れていませぬ。しかし、そういう中で人にかこまれていても孤独になつていく老人が多くいます。

コミュニケーションがとれないのです。力がなのです。淋しいのです。それぞれの方の軌跡なのです。「死んでくれてよかった」など、いわれなように、そうならないように。他の人に対して、そのような扱いはしたくないものです。

皆様の「風」は自由な表現の文章なのだろうと思えます。歴史学者や文学者が作るのではなく、既存の文章や文芸作品とは異なり、そういったものを越えたもの、殻を破っていく個性に満ちたものを感じます。みずからの生きざまを創作、表現しておられる力強さが伺えます。これからもその

力を発揮し、この文集を本物にしていってください。

戸田見成

照光寺住職

小美玉市議会議員

第一部の最後が照光寺住職の応援歌であったからといふ訳ではないが、編者の好きな頃に「出得するも出得せざるも、渠(かれ)も儂(わ)れも自由なり、神頭は鬼面と共にならび、敗闕も当に風流なり」がある。自分流の勝手な解釈すると「人は皆、それぞれ好きな事をしていい。しかし、時には失敗もある。だが一生懸命にやった結果としての失敗であれば、それは風流の一つである」となる。ふるさと風の創刊にあたっては同様に考え、無言のうちこれを強制して来たのかも知れない。100号記念、別冊ふるさと風を発刊するに当たり、一ノ瀬綾姉、市川紀行兄ほかの方々より過分なる言葉を戴き、感謝するばかりです。

一ノ瀬姉の言われる様に、作家は内容の如何にかかわらずこの身を削るもので、言葉に落した後は、「この身を削つての言葉だ、文句あるか」と聞き直るしかない。そんな覚悟で「風の言葉」を吐ける会報に育つて行くことを思っています。

(編者・白井)

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会会員募集中!!

会報「ふるさと風」も、お蔭様で創刊100号を迎えました。

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くこのふるさとを自慢したいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

風の言葉絵同好会参加者募集

全てが自由で自在であれ、のふるさと風の会から生まれた、兼平智恵子の風の言葉絵。この新しい自分表現の「風の言葉絵」を楽しむサークルでは、一緒に言葉と絵を楽しむ参加者を募集しています。

詳しくは、兼平智恵子(☎0299-26-7178)へお問い合わせください。

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

ことば座「朗読教室」受講生募集

朗読は演劇です。

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることです。

物語とは、はじめに言葉があって紡がれたのではなく、はじめに作者の心があって言葉に紡がれたものです。物語(詩)を朗読に表現する時は、言葉に紡がれた作者の心の真実をうけて、表現者として劇しく(はげしく)そのドラマ(物語)を演じることが必要です。

何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えて見ませんか。

演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。

月二回程度の授業を考えております。(受講料月額3,000円)

脚本・演出家の白井啓治がに指導します。

連絡先 080-3125-1307(白井)